

第1510回(7月9日)

環境保全型農業確立のための 政策課題

(京都大学農学部) 嘉 田 良 平

1. 地球環境問題と農業

地球環境問題と農業は、次の3つの側面から議論されている。第1は、地球環境問題と農業とのリンケージの側面であり、温暖化、砂漠化、熱帯林・マングローブの破壊、生物種の消滅などの問題として取り上げられている。第2の側面は、農業の持つ二面性であり、窒素肥料による地下水汚染など、特に加害者としての農業生産のあり方が、80年代の農産物過剰問題とあわさって、生産抑制的に議論されている。第3の側面は、農業外(都市・消費サイド)からの問題提起であり、食・農・環境のリンケージにおいて議論されている。

2. 岐路に立つ日本農業と日本の食卓

次に、地球環境問題から日本の農業・食糧問題へと議論を移せば、周知のとおり、日本農業と日本の食卓とは極めて厳しい局面にある。もし、ガット交渉、コメ自由化の圧力の下に、ガットの言う通りになれば、輸入穀物は日本の国土を窒素過多するという三輪氏の指摘に代表されるように、資源利用が歪められるだろう。また、日本の持続型農業を検討していくうえで、「中山間地域」における農林業と資源管理のあり方、農業の担い手、崩れゆく農林業資源とその影響、輸入食品の安全性といった問題が、絶えず背景として存在し、かつ、そのような問題との関連で日本の持続型農業が検討されねばならない。

3. 環境保全型への転換を図る欧米農業

ところで、近年、欧米農業は環境保全型農業へと転換を図っているが、その柱は、環境、生態系との調和である。また、このような転換の背景として、① 地球的規模での人口・資源・環境問題、② 農業そのものの持続性

の喪失、③ 農業の環境に対する負の影響、④ 農産物・食糧の安全性への強まる懸念、の4点を挙げるができるだろう。このような粗放型、環境保全型をめざすヨーロッパ農業・農政の問題は、政府が財政的にもちこたえ得るかという点にあらう。他方、アメリカ農業は、80年代からの代替農業の流れの中で、低投入持続型農業(LISA: Low Input Sustainable Agriculture)に挑戦しているが、低投入は低産出という問題に絶えず付きまわっている。なお、先進国のみならず途上国にも適用可能となり、特に途上国にふさわしい持続可能な農業システムの確立が急務であることは言うまでもない。

4. 21世紀・日本農業の進路を探る

かつて、「外部不経済」論において経済効率性追求の限界が理論的に研究されてきたが、現在では、いかに環境価値を再評価し、いかに実践に結び付けていくかが重要な研究課題となっている。また、農林業のストック的価値は見直されるべきであり、特に洪水防止機能等の多面的機能をもつ水田に対しては、「環境水田」としての価値を認めて、日本型デカップリングを提唱していく必要がある。同様に、畑作中心の欧米と稲作中心の日本との違いに留意しつつ、低投入型日本農業(水田農業)の意義、可能性、政策課題を検討していかなければならないだろう。他方、水田農業における持続型農法の確立に向けて、リサイクル型農林業の構築が求められるだろうし、さらに、「生産適地論」からみた日本農業の位置を明らかにして、世界の中の日本、地球環境の中の日本農業といった見地から絶えず議論を重ねていくことが肝要である。

(文責・矢部光保)